能おおしま草紙

第29号

（年2回発行）

発行所
喜多流大島能楽堂
〒720-0814
広島県福山市光南町2-2-2
TEL 084-923-2633

P.2 ここ一番の舞台　吉阪一郎
P.4 大島能舞台創建百周年に想う　守矢雅彦
P.6 京都と福山で得たもの　ジュビルス・モーア
P.8 能がつなぐ人の縁　柴田聡子

稽古の効用

喜多流シテ方　大島衣恵

「能を一般の人が習うことができるのですか」と驚かれることがあります。能面や装束を付けた本格的な能の舞台をご覧になって、ご自身のお稽古とはなかなか結び付かないものなのだと思います。

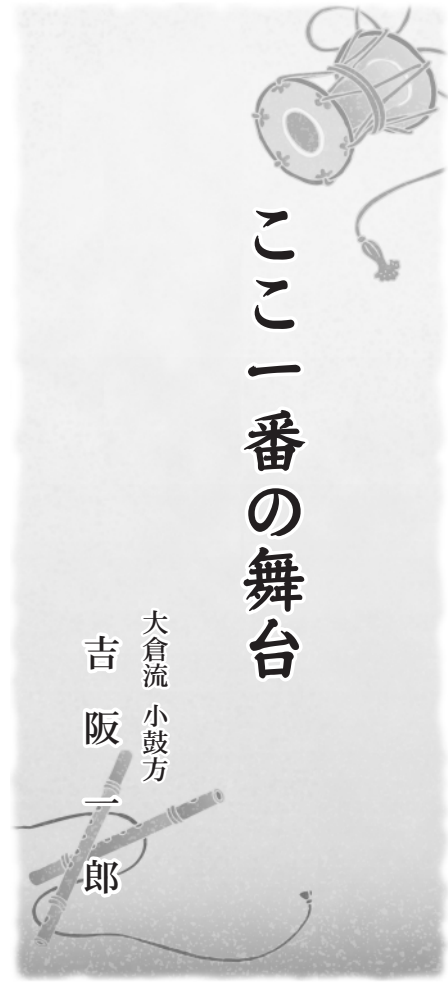
能はおよそ六百年の歴史ある伝統芸能ですが、その伝統を紡いできたのは決して専門家だけではありません。戦国時代の武将達、江戸時代には武士だけでなく町民や寺子屋の子ども達も謡を習い、舞を嗜んでいました。謡や舞の稽古を通して心身を養っていたのです。また結婚式で『高砂』を謡うなど、祝の席に謡う風習も能の伝統を支えた一つの形だと思います。

謡を稽古すると呼吸が深くなり、舞の稽古は集中力を高め良い姿勢を保つための体の芯が備わります。一時話題にもなったインナーマッスル（内筋）を鍛える効果があるのです。現代の便利で楽な生活スタイルでは呼吸も浅くなり内筋を使う機会も少ないため、日本人の体と精神が脆くなっていると言われています。現代人の心身を健やかに保つために、謡や舞の稽古が役立てるのではないかと思っています。

また謡十徳、十五徳という言葉があります。「行かずして名所を知る」「老いずして故事を知る」など謡曲を稽古することで得られる徳を十項あるいは十五項にまとめた言葉です。能に描かれている古の物語、神話や各地の伝説を謡っているうちに、その世界がいつの間にか体に入り込んで様々な風景が見えてきたり、古き良き教えに触れた心持になることがあります。これもまた稽古の効用であると思います。

茶道や華道、書道など日本の伝統文化には「道」のつくものが多くあります。文化や芸術を学び習うことを人々が道とし、生きる上での心の柱としてきたのが日本文化の特徴であり、現代にも続いている所以ではないでしょうか。能の道もその一つとして長く広く続いていくよう努めたいと思っています。

仕舞「笹ノ段」大島衣恵（2013.12.22）大島能楽堂　池上嘉治撮影



ここ一番の舞台

大倉流 小鼓方
吉阪一郎

演技を終えた直後に込み上げた涙。ソチ五輪での浅田真央さんの演技に強く心を打たれた。大きな期待を背負ったプレッシャー、極限の緊張から解放された安堵、永きに渡る努力と挫折の末にようやく自分が納得できる演技が出来た達成感、押しとどめていた様々な思いが一気に溢れ出たのだろう。いつの間にか能の舞台に立つ自分と重ねて考えていた。

普段の舞台を疎かにしているわけではないが、「ここ一番」の舞台が能にもある。扱いの重い演目や特別な記念の会がそれだ。観客からは、いつにもまして期待されているように思われる。囃子方である自分の立場からすれば、その番組に抜擢されたことを意気に感じて舞台に臨むのだが、間違えないだろうか、鼓は良い音色が出るだろうか、声は出るだろうかと不安は絶えない。舞台には勝負の一面がある。世阿弥の時代からも役者同士でライバル意識があったように、同じ日の前後の演目で勤める同役、同じ舞台を勤める他の囃子方にも負けたくない。それが大きなプレッシャーになる。実力以上のことができるはずもないのだから普段通りにやればいいのだが、力を出し切れなかったらどうしようと不安に襲われるのだ。緊張からカチコチになって手が震えながら鼓を打つ事もある。そんな時はトリプルアクセルを失敗したときのように、誰が聴いてもわかるくらい情けない音になる。

吉阪一郎（きちさかいちろう）氏

日本能楽会会員
国立能楽堂研修課程講師
社中の会「若葉会」主宰
昭和40年（1965年）生
幼少より故祖父 吉阪修一に稽古を受ける。
昭和50年、独鼓「竹生島」にて初舞台。
昭和61年、大倉流小鼓十六世宗家 大倉源次郎師に内弟子入門。
平成３年、独立。
「獅子」「乱」「鷺」「道成寺」「卒都婆小町」などの大曲を披く。
ミラノ、ローマ、パレルモ、パリ、ロンドン、アメリカ西海岸、デトロイト、ヒューストン、チューリッヒ、ボンなど世界各国での能公演に参加。
平成18年、フランス　ポウ、パリ２都市でコンテンポラリーダンサー、ミエ・コカンポーとのコラボレーションなど幅広い分野で活躍する。
京都の若手囃子方と「せぬひま」を結成。能、狂言の魅力を幅広い客層にアピールする活動を展開中。

小鼓は音の良し悪しがはっきりしている楽器なので、音色には特に神経質になる。最初に出た音が良ければその後は雑念なく演奏を続けて行けるのだが、もし悪ければ音のことばかりが気になり演奏に集中できなくなってしまう。無論、納得できる演技とはほど遠く疲労感は計り知れない。肩を落として家に帰り、納得のいく音色を求めて何時間も鼓を打つ。スランプに陥ればこの繰り返しだ。良い音色を出すことが自分にとって納得のいく演技への第一関門なのだが、なかなか上手くできない。大きな弱点である。そのかわりに掛け声や間（ま）を自分の持ち味として能に貢献できるよう心がけているつもりだ。

昨年末に大島能楽堂創建百周年の記念の会で「石橋」のお役を頂いた。喜多流は「石橋」を大切に扱っておられる。大島輝久氏の初演のお相手だったが、私も喜多流では初めてだった。まさに「ここ一番」である。本番の数日前に行われた申合せで、囃子方が空中分解寸前の場面があった。楽屋に戻り二言三言の打合せをしたものの、どうなってしまうのだろうと不安を残した。迎えた当日、獅子の登場を予感させる冒頭の場面、裂帛の気合いで掛け声をかける。もはや不安を感じる余裕など無い。いよいよ獅子が現れるあの場面。囃子方は各々の主張を貫き、せめぎ合いながらもギリギリのところで破綻すること無く獅子を登場させることができた。塩津先生と輝久氏のまさに獅子の勢いのごとく凄まじい気迫が伝わり自分を奮い立たせた。十数分間の短い時間、音色を含めすべてが満足だったとは言えないが、妥協のない真剣勝負に持てる力を出し切れたという点では納得できる舞台を勤めることができて清々しい気持ちだった。

そもそも、どれだけ経験や努力を重ねたとしても全てを満足できる人などいないのかもしれない。満足してしまえば進歩はないのだから。世の中がどんなに変わっても、「ひたむきさ」は普遍的な価値観だ。稽古を積み日々研鑽している能の役者にも人の心を動かす力がある。そんな役者になれるように、これからも丁寧に舞台を勤めて行きたい。

半能「石橋」白獅子 塩津哲生　赤獅子 大島輝久（2013.12.22）大島能楽堂　池上嘉治撮影
太鼓 前川光範　大鼓 亀井広忠　小鼓 吉阪一郎　笛 杉信太朗

大島能舞台創建百周年に想う

広島大島会 会長
守　矢　雅　彦

「高砂やこの浦舟に帆を揚げて～……」

「庭の砂は金銀の～……」

「花咲かば告げんと言いし山里の～……」等々、抑揚の効いた独特の節回しの素晴らしい言葉の数々を、幼い頃より良く耳にした記憶が今でも鮮烈に思いだされます。今にして思えば、お能の中で謡われる謡曲の一節の言葉でした。

私と大島先生と、また同時にお能との出会いは、昭和五十年以来のことでございます。

我が家の菩提寺であります広島市の妙慶院清岸寺にて、仕舞、謡曲の教室を、当時は月四回開催されていました。お寺に伺っている時に大島先生の謡曲を謡われている声が聞こえ、早速住職からお話をお聞きしますと、能楽喜多流職分の素晴らしい先生であることを教えていただきました。即座に決意し入門のお願いにあがりまして、昭和五十年の暮れより入門させていただき、それ以来今日に至っている次第です。

入門間も無くの翌年一月に広島大島会の新年初謡会が開催されて、私にも出演する様にとのお話を頂き、急遽「高砂」の一節である「四海波静かにて～」を教えていただき、独吟にて出演しました。紋付・袴もまだ用意出来ていませんでしたので、洋服のまま舞台に上がり、作法も何もかもわからないまま、謡った事を今でも強烈に記憶しています。

喜多流大島能楽堂に於かれましては、平成二十五年に能舞台創建百周年を迎えられました。これを記念して、昨年十二月二十二日に記念の能楽公演を盛大に挙行されました。まことにお目出度く記念すべきお能でした。客席は満員の大盛況にて補助席を用意して対応されることとなりました。

私が能楽堂に初めてお邪魔いたしましたのが、入門してから二～三年後でした。想像した以上に素晴らしく立派な能楽堂でしたので、この様な格式の高い舞台で一度は舞ってみたいものだと思ったことでした。初代の大島能舞台は大正時代に建立され、昭和二十年の戦災で焼失しましたが、久見先生が戦後まもなく再建されました。そして再び本格的な能舞台として昭和四十六年に建立されて、現在の能楽堂は三代目の建物とお聞きしています。私が初めて能楽堂に出演させて頂いたときは建立後まだ間もない時で、かすかに檜の香りが漂っていた様な時でした。

さて大島能舞台創建百周年を記念しての演能は秘曲とも大曲とも言われる「木賊」と華やかな共舞の「石橋」が演じられました。

「木賊」は大島政允先生が格調高く舞われました。静かな中に断ち切れぬ親子の情をじっくりと演じられ、私は勿論満員の観客の方々に大変な感動を与えられました。また子方を演じられた孫の大島伊織君が見事にその役目を果され感心しました。「石橋」は大島輝久師と師匠の塩津哲生師が舞われました。対照的に華やかな動きの激しい共舞で、お二人の息がぴったりと合った素晴しい舞でした。

狂言は野村萬斎師が「棒縛」を、仕舞は豪華な顔ぶれの職分の先生方が出演され、創建百周年を記念し、祝うに素晴しい内容で満席の観客を共に魅了いたしました。

広島大島会も会員数がここ二～三年横這い状態で推移していますが、大島能楽堂におかれましては幼い子供たちを対象とした、能楽教室を各地で開催して来られ、教室の参加者は常に満員の状況のようにお聞きしています。こういった催しが継続されていくことにより、能楽教室の会員も、将来的には大いに増加していくことと思っています。

広島大島会では春と秋の年二回練習の成果の発表会を開催致しています。私事で恐縮ですが本年十一月三十日（日）、大島会秋の会（アステールプラザ能舞台）において、大島先生ご指導により孫の雅喜を牛若丸役として、能「鞍馬天狗」を演じさせて頂くことになりました。今年に入り目下鋭意特訓中です。入場無料ですので、お誘い合せてご高覧下さい。秋の会にて多くの方にお目にかかれますことを楽しみにしています。

今後とも喜多流大島能楽堂が十年、二十年先へ向けて更なる飛躍発展されん事と、日本古来の能楽の愛好者がますます多くなることを祈念しまして筆をおきます。

京都と福山で得たもの

ジュビルス・モーア

Jubilith MOORE 氏

米国バードカレッジ卒業。
「シアター能楽」創立メンバー。
1993年よりユリコ・ドイに師事し「シアター幽玄」芸術監督。
日本の伝統的演劇と現代アメリカ演劇の俳優、監督、作家。
能楽をリチャード・エマート、松井彬、大島衣恵に師事。
国際交流基金フェローシップで来日、能楽を観世流野村四郎、
狂言を和泉流石田幸雄、小鼓を幸流釜三夫に師事。
出演作品：「鷹の井」老人
グレッグ・ジオバーニ作「パインバレンズ」ワキ
デービッド・クランドール作「クレージー・ジェーン」地頭
ジャネット・チョング作「パゴダ」ワキ

〈概要〉

シアター能楽主催の「二〇一三能装束ワークショップ」は、世界で最も洗練された舞台芸術の一つである能楽の装束について多くのことを学ぶ貴重な機会でした。能装束がどのようにして製作され、又演能に合わせて選別されるのか、さらに修復保存管理されるのか、装束を付けての所作や歌舞の素晴らしさを考究しました。

ワークショップの前半（京都）　能装束について専門的知識の豊富なモニカ・ベシイを講師にレクチャーと実技講習。西陣の織物、刺繍、摺箔など練達した職人たちの伝統作業を見学、研修をしました。

後半（福山）　喜多流シテ方職分、大島輝久師を講師に実際に演目に合わせた能装束の着付方法を実習。研修の期間中、定期公演の申合せと本番、能「籠太鼓」「邯鄲」を鑑賞。楽屋での装束付けも見学しました。二日間で、女物、男物（童子、狂女、鬼など）の着付けの実技をこなし、更に女物の鬘の付け方、装束の基本的な畳み方、縫い糸の縒り方や基本的な装束修復方法も学びました。

このワークショップに参加して、能を新しい視点で洞察することができるようになりました。ワークショップに参加する前、能装束に対する見方は、ただ表面的にその絶対的な美しさに驚嘆していたに過ぎなかったのです。装束の様々な製作過程も知り、それらが総合的に包括され

てこそ能楽という緻密な芸術表現が可能であるのだと新たに認識しました。

〈成果〉

私はアメリカで狂言を演じる団体「シアター幽玄」の団員ですが、この能装束ワークショップに参加した成果は大変貴重なものとなりました。団員としてこのワークショップに参加して気づかされたことが二つあります。先ず装束の着付けと保存・管理・修復の重要性。二つ目は英訳の古典狂言や新作狂言等に使用する装束デザインを考えていくことの重要性です。

「シアター幽玄」は一九七八年発足以来、英語での狂言を上演しています。その間に使用してきた装束は傷みが酷く修繕すべき深刻な状態にあります。また、長く使用しないまま傷んでしまった装束もあります。もっと上演の機会を増やし装束の活用を進めていくことが理想的で、このことが演者と観客に対してばかりでなく伝統を受け継ぐことになるのだと思います。最近、使用可能な状態の良い装束を譲り受けましたので、装束の修復保管の技能を身につけたいとも思い、この「装束ワークショップ」に参加しました。今後、細心の注意を払い装束の保存管理をしていきたいと思います。

このワークショップ参加経験で装束の保存管理の基礎的技術を身に付け、以前の無知と畏敬の念の入り混じった考えを一時的にせよ取り去ることができました。以前、私たちの所有する装束で特に古くて高価なものは余り手をかけなかったのです。今後はこれらの装束活用を目指し、何から始めるべきか、研究と実践を進めていきたいと意欲に燃えています。シアター能楽やシアター幽玄の仲間にも伝統的装束に対し敬虔且つ積極的に修復作業と保存管理をするよう伝えていきたいと思っています。

今まで私は過去の経験に基づいて装束付けをしていました。しかし、今後は装束選択の伝統的な方針を理解した上で、装束そのものが内蔵する美と力を理解することが、今後の私の活動を導いてくれると信じています。

〈結び〉

私はこのワークショップに参加するまで疲れていて何かと感情的になり、挫折感を持ったまま参加しました。しかし能装束の熟練した技芸と美しい繊細な作業を見学体験し、私は幸せを感じ、質の高い芸術にふれることが人生の喜びであることに改めて気づかされました。

私の舞台芸術での理想を追い求める戦いは今も続いています。私は日本の古い伝統の中で日々修練をしている能楽師と出会い、啓発され発奮しました。この舞台芸術の理想を追い求める戦いは無限に続きます。その戦いの最終ゴールはその過程にあるということも再認識しました。芸術は勝利を得るか失うかという問題ではなく、生きるに値する芸術的実践に生涯、取り組みたいという私の願望を強くさせてくれた能装束ワークショップであったと実感しています。

（原文・英語。英訳・寺田良二。文責・大島泰子）

能がつなぐ人の縁

柴田聡子

父の本棚に古い和綴じの本があったことは、子供の頃から覚えていました。しかし、それを実際に手にとって開いてみたのは、それから何十年も経ったつい五年ほど前のことです。結婚前に観世流の謡仕舞を勤め先の能楽部で稽古していた父、結婚後は止めてしまい、長いブランクの末再開したのは六年ほど前のことでした。姫路の地元の神社には能舞台があり、年に何度か町の有志が謡と仕舞を奉納しており、父もその舞台に立つのをイギリスからの一時帰国時に観に行ったのが、能に近づく私の第一歩でした。以来、父の師匠の同門会などを父に同行して鑑賞し始め、能に引き込まれていったのです。それまで歌舞伎の大ファンで十五年以上観続けていましたが、能の研ぎ澄まされた精神性、余分なものを削ぎ落としたような型の美しさは、新たに出会う魅力でした。

帰国するたびに能を頻繁に鑑賞し始めた頃、ちょうどツイッターも始めていました。思いもよらず、ツイッター上には能クラスタ（能を愛好する方々のグループ）なるものが存在し、その方々と知り合い、情報交換し、実際に能会の見所などでお目にかかって交友が広がっていきました。そのように知り合った方のお一人に、たまたま京都の金剛能楽堂で公演される英語能「パゴダ」に招待していただいたのが二〇一一年の六月末。それまでに、とある小鼓の素人会で大島衣恵さん・輝久さんの謡と舞を一度拝見する機会があり感服していたので、初めてお二人の能を拝見できるのが光栄でした。期待通りの素晴らしい舞台にとても感動したのはもちろんでしたが、言語は英語に変わりながらも見事に能の構造と精神性を持ち、漢詩のような雄大なロマンも感じさせるこの作品に、私はとても胸を打たれます。終演後、招待して下さった知り合いが、作者である中国系イギリス人ジャネット・チョンさんに紹介して下さり、直接感動を伝えるとともにイギリスでまたお会いしたいとお話することができました。

二〇〇五年から住んでいたイギリスのバーミンガムからロンドンへ、二〇一二年十月に転居したのを機に、ジャネットさんに連絡をとったのは京都で初めて会って以来一年以上も後。すると、ちょうどそのタイミングで、ジャネットさんが企画をした舞台写真家クライヴ・バーダさんの写真展が、ロンドン東部にあるロイヤル・オペラ・ハウスの付属施設で開催されるとのことで、そのオープニング・パーティーに招待してくださったのです。クライヴさんの舞台写真家としての四十年のキャリアの節目になるようなこの展覧会は、世界的に有名なショルティや

バーンスタインといった指揮者、パヴァロッティやドミンゴなどオペラ歌手、メニュインやキーシンといった音楽家など、これまで歴史的な一瞬一瞬を撮りためた数えきれないほどの写真の中から選び抜かれた一〇〇点を紹介するもの。実は、その中の一点は「パゴダ」を舞う衣恵さんの写真でした。日本人の被写体は小澤征爾さんと武満徹さんに加え衣恵さんの三人だけで、会場で衣恵さんの写真パネルの前に立った時、深い感動に包まれると同時に日本人として、一人の能ファンとして、とても誇らしく思いました。ジャネットさんからの依頼で、私が日本語に訳した彼女のメッセージと共にこの写真展の図録を大島家にお送りしたのを機会に、二〇一三年の大島能楽堂定期公演にうかがった際に大島家の皆様にご挨拶できたのです。

能を通じて知り合った友人たちを「能友（のうとも）」と私の仲間内では呼んでいますが、私がお稽古してもらっている京都の観世流の師匠を紹介してくれたのは、ツイッターを通じて知り合った大阪在住の能友。同じくツイッターを通じて知り合った東京在住の能友は喜多流でお稽古をしていて、流派を超えていろんな情報交換をしながらいつも刺激をもらう仲。これらの能友をはじめ、ジャネットさん、ジャネットさんを通じてお近づきになれた大島家の皆様、また、新たに共通の話題ができて互いの稽古の励みになっている父との関係も含め、能を通じてつながった人々とのご縁は、今の私にとって掛け替えのないものです。

「No Noh, No Life（能が無い人生はありえない）」と思うほど能が好きな私ですが、それは能自体に魅力があるだけでなく、能を通じてありがたいご縁がどんどん広がっていくからだ、とつくづく思っています。

能を観始めて約５年。
観世流の稽古を始めて約３年の一能ファン＆初心者。
2005年から住んでいたイギリスより2014年３月に東京に転居。
能鑑賞と稽古にさらに勤しんでおります。

能「隅田川」シテ 友枝昭世　子方 大島伊織（2013.11.16）
アステールプラザ能舞台

能「三輪」神遊 シテ 大島政允（2013.9.15）　大島能楽堂

能「葛城」シテ 大島衣恵（2013.11.17）大島能楽堂

能「紅葉狩」シテ 大島政允（2013.11.16）
アステールプラザ能舞台

P.10,11写真　池上嘉治撮影

大島能舞台創建百周年記念能

十二月二十二日(日)十二時半始
喜多流大島能楽堂

〈仕　舞〉

笹ノ段　大島　衣恵
網ノ段　松井　彬
駒ノ段　金子　匡一
鐘ノ段　長田　驍

〈　能　〉

木賊

ツレ(里　人)　友枝　真也
ツレ(里　人)　佐々木多門
ツレ(里　人)　長島　茂
子方(松　若)　大島　伊織
シテ(松若の父)　大島　政允

ツレ(従僧)　喜多　雅人
ワキ(僧)　福王茂十郎
ツレ(従僧)　是川　正彦

大鼓　亀井　忠雄
小鼓　成田　達志
笛　杉　市和

後見　長田　驍　狩野　琇鵬
中村　邦生

地謡　金子敬一郎　大村　定
狩野　了一　香川　靖嗣
松井　彬　友枝　昭世
友枝　雄人　粟谷　能夫

〈狂　言〉

棒縛

シテ(太郎冠者)　野村　萬斎

アド(　主　)　高野　和憲
アド(次郎冠者)　深田　博治

後見　内藤　連

〈仕　舞〉

笠ノ段　香川　靖嗣
玉ノ段　友枝　昭世

〈半　能〉

石橋

連獅子

ツレ(赤獅子)　大島　輝久
シテ(白獅子)　塩津　哲生

ワキ(寂昭法師)　福王茂十郎

大鼓　亀井　広忠
小鼓　吉阪　一郎
太鼓　前川　光範
笛　杉　信太朗

後見　金子　匡一　狩野　了一
塩津　圭介

地謡　佐藤　寛泰　梅津　忠弘
佐々木多門　中村　邦生
友枝　雄人　出雲　康雅
友枝　真也　長島　茂

能「木賊」シテ 大島政允　子方 大島伊織（2013.12.22）大島能楽堂

2014年 演能ご案内

開催日	催し名	開演	会場	鑑賞料	演目
4月20日（日）	第237回 大島能楽堂定期公演	12:30	大島能楽堂	年間共通券20,000円 一般券　6,000円 学生券　2,000円	能「竹生島」　松井彬 狂言「寝音曲」　茂山七五三 能「田村」　大島政允
5月10日（土）	繪処能	15:00 18:00	繪処 アラン・ウエスト	5,500円	能舞「羽衣」　大島衣恵
5月18日（日）	喜多流春の会	10:30	大島能楽堂	無料	能「経政」 舞囃子・仕舞
5月31日（土）	燦の会	13:00	東京喜多能楽堂	正面指定 8,000円	能「自然居士」　大島輝久
6月15日（日）	第238回 大島能楽堂定期公演	12:30	大島能楽堂	年間共通券20,000円 一般券　6,000円 学生券　2,000円	能「鬼界島」　金子匡一 狂言「延命袋」　茂山あきら 能「杜若」　大島衣恵
7月28日（月）	福山八幡宮薪能	18:30	福山八幡宮	4,000円	狂言「因幡堂」　茂山正邦 能「大会」　大島輝久
8月10日（日）	三和の森光信寺薪能	18:30	光信寺	3,000円	狂言「口真似」　井上松次郎 能「船弁慶」　大島輝久
8月18日（月）	後楽園幻想能舞台	18:30	岡山後楽園能舞台	6,000円	狂言二番 能「葵上」　大島衣恵
8月24日（日）	喜多流職分自主公演	12:00	東京喜多能楽堂	6,000円	能「半部」　大島輝久
9月21日（日）	第239回 大島能楽堂定期公演	12:30	大島能楽堂	年間共通券20,000円 一般券　6,000円 学生券　2,000円	能「清経」　大島輝久 狂言「口真似」　茂山千五郎 能「殺生石」　大島衣恵
10月19日（日）	福山総合文化祭 秋の会	11:00	大島能楽堂	無料	仕舞・素謡
11月 3日（祝）	後楽能	12:00	後楽園能舞台	3,000円	能「海人」　大島衣恵
11月 7日（金）	はじめての能楽大会	13:00	後楽園能舞台	無料	能学習発表・鑑賞
11月16日（日）	第240回 大島能楽堂定期公演	12:30	大島能楽堂	年間共通券20,000円 一般券　6,000円 学生券　2,000円	お話　金子直樹 狂言「太刀奪」　茂山正邦 能「三井寺」　大島政允
11月23日（日）	喜多流職分自主公演	12:00	東京喜多能楽堂	一般券 6,000円	能「黒塚」　大島政允
11月30日（日）	広島大島会秋の会	10:00	アステール能舞台	無料	能「羽衣」「鞍馬天狗」 「俊成忠度」

編集デスクより

大島能舞台創建百周年の年に中国文化賞と催花賞を受賞しました。社中の方々を始めご支援下さいました多くの方々に心からの御礼を申し上げます。『命には終わりあり、能には果てあるべからず』肝に銘じて日々邁進してまいります。

喜多流大島能楽堂

〒720-0814
広島県福山市光南町2−2−2
TEL 084−923−2633
FAX 084−923−8730
http://www.noh-oshima.com

「服部記念 法政大学能楽振興基金」よりの「第24回催花賞」を喜多流大島能楽堂が受賞。授賞式は2014年１月17日、東京都内の某ホテルにて賑々しく執り行われました。催花賞：能楽の普及・発展に貢献の大きい個人・団体の顕彰。